

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第28集

市内遺跡発掘調査概要報告書Ⅳ

西都原地区遺跡
日向国分寺跡

1999

宮崎県西都市教育委員会

序

西都市教育委員会では、国庫補助を受けて、市内遺跡発掘調査として西都原地区遺跡及び日向国分寺跡の確認調査を実施しました。本書は、その確認調査結果の概要報告であります。

今回の調査で、西都原地区遺跡では、縄文時代早期の焼窯群をはじめ、弥生時代後期の竪穴式住居跡や柱穴群が検出され、古い時代から生活の適地として利用されていたことが再確認されました。

また、日向国分寺跡では、回廊跡が確定され、さらに、最低でも3回は建て替えられたことが判明しました。また、主要伽藍配置の南西部でも溝状遺構が確認され、このことによって、南側半分には確実に巡らされていることが判明しました。

これら遺構等は、西都市の古代史解明のためには極めて重要なものであり、大きな成果をあげることができました。

本報告が、専門の研究だけでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を得るための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた調査指導員の先生方、宮崎県教育庁文化課をはじめ、発掘調査にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成11年3月31日

西都市教育委員会

教育長 菊 池 彬 文

例　　言

1. 本書は、西都市教育委員会が国庫補助を請けて、平成10年度実施した市内遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 平成10年度の確認調査は、西都市大字三宅字寺原に所在する西都原地区遺跡内（たばこ耕作に伴う天地返し地点）、西都市大字三宅字国分に所在する日向国分寺跡の5ヶ所を対象に行った。調査は平成10年8月4日から平成11年3月5日まで行った。
3. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
4. 調査及び図面作成等については袁方政幾・笠瀬明宏が担当した。
5. 本書の執筆・編集は、第Ⅰ・Ⅱ章は、袁方政幾・笠瀬明宏、第Ⅲ章は袁方政幾、第Ⅳ章は笠瀬明宏が担当した。
6. 本書に使用した方位はFig. 1・2・5・6は平面直角座標系第II座標系であり、Fig. 3・4は磁北である。この地点の磁北は真北より $5^{\circ} 25'$ 西偏している。
7. 本書に使用した標高は海拔絶対高である。
8. 遺物、土層に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版標準上色帳』に準拠した。

目 次

第Ⅰ章. 序説	1
第1節. 調査に至る経緯	1
第2節. 調査の体制	1
第Ⅱ章. 遺跡位置と歴史的環境	2
第Ⅲ章. 西都原地区遺跡の調査	4
第1節. 調査区の設定と概要	4
第2節. 造構と遺物	6
第3節. 小 結	9
第Ⅳ章. 日向国分寺跡の調査	10
第1節. 調査区の設定と概要	10
第2節. 造 構	12
第3節. 小 結	14
報告書抄録	21

挿図目次

Fig. 1 西都原古墳群周辺位置図

Fig. 2 西都原地区遺跡調査区域図($S = 1/10,000$)

Fig. 3 第8地点住居跡($S = 1/40$)・出土遺物($S = 1/4$) 実測図

Fig. 4 第24地点住居跡実測図($S = 1/40$)

Fig. 5 日向国分寺跡現況平面及びトレンチ配置図($S = 1/1,000$)

Fig. 6 日向国分寺跡A区造構実測図($S = 1/100$)

図版目次

PL. 1 - 西都原地区遺跡 -

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1. トレンチ調査状況（第1地点） | 2. トレンチ調査状況（第10地点） |
| 3. 第14地点焼碟群検出状況 | 4. アカホヤ火山灰下層調査状況 |

PL. 2 - 西都原地区遺跡 -

- | | |
|--------------------------|----------------|
| 5. 第26地点ピット群（掘立柱建物跡）検出状況 | 6. 第8地点住居跡検出状況 |
| 7. 第24地点住居跡検出状況 | 8. 第8地点住居跡出土土器 |

PL. 3 - 日向国分寺跡第4次 -

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 9. 日向国分寺跡A区全景（南西より） | 10. A区軒平瓦出土状況（西より） |
| 11. A区東側遺構検出状況（南より） | 12. A区南側遺構検出状況（北西より） |
| 13. A区東側遺構検出状況（南西より） | |

PL. 4 - 日向国分寺跡第4次 -

- | | |
|---------------------------|--|
| 14. B区第3トレンチ遺構検出状況（北より） | |
| 15. B区第3トレンチ溝状遺構完掘状況（東より） | |
| 16. C区第1トレンチ溝状遺構完掘状況（北より） | |
| 17. C区第1トレンチ遺構検出状況（西より） | |

第Ⅰ章. 序 説

第1節. 調査に至る経緯

西都市は県内でも指折りの生産地であるが、長年の作付により土地が弱り、病気も多くなっていることから、天地返しをする地域が増えてきている。すでに、長岡・小豆野原台地等では行われ、品質的・生産的にかなり向上しているものの、地下造構に与える影響は大きく遺跡の消滅が懸念されている。このような中、西都原台地にもその波が及ぶこととなり、たばこ耕作組合と埋蔵文化財の現状保存について協議を重ねたが、生産者の生活権等を考慮すると現状保存が困難であることから、遺構・遺物が検出された場合には現状保存を前提とした協議をすることなどを条件に、確認調査を実施することになった。

一方、日向国分寺跡は、昭和23（1948）年に団長を東京大学駒井和彌助教授、主として早稲田大学で組織された日向考古調査団によって、また、昭和36（1961）年及び平成元年度には県教育委員会によって発掘調査が実施されたが、僧坊跡（平成元年度）と推定される造構以外には、その主要伽藍配置について明確にされていない。さらに、当時の報告書の周辺写真と現在では寺域内外の宅地化が著しく、畠地や空き地の確保も困難であり、伽藍配置の確認が急務であったことから、西都市教育委員会により平成7年度から、主要伽藍配置等の確認調査を実施することとなった。

第2節. 調査の体制

調査主体

教 育 長	菊 池 彰 文
社会教育課長	佐々木 美 徳
同 文化財主事	日 高 憲 一
同 主事補	長 友 英 樹

調 査 員	同 文化財係長	養 方 政 幾
	同 主事補	笠瀬 明 宏

調査指導員	日 高 正 晴	（西都原古墳研究所長）
	柳 沢 一 男	（宮崎大学教育学部教授）

第II章. 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西方には標高50~80mの通称西都原と呼ばれる台地がある。台地上には柄鏡式形態の前期古墳を含む前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成された特別史跡・西都原古墳群が所在し、また、南九州独特の埋葬形態を有する地下式横穴墓も12基確認されている。

この西都原台地は、九州山地から南南東に向かって舌状に細長く延びた洪積世台地で、その南端には產土神の三宅神社が創建している。その神社地域から急坂を下ると、上尾筋・下尾筋遺跡の所在する標高30m程の中間台地になり、さらに下ると標高12m程の沖積平野へとつながっている。

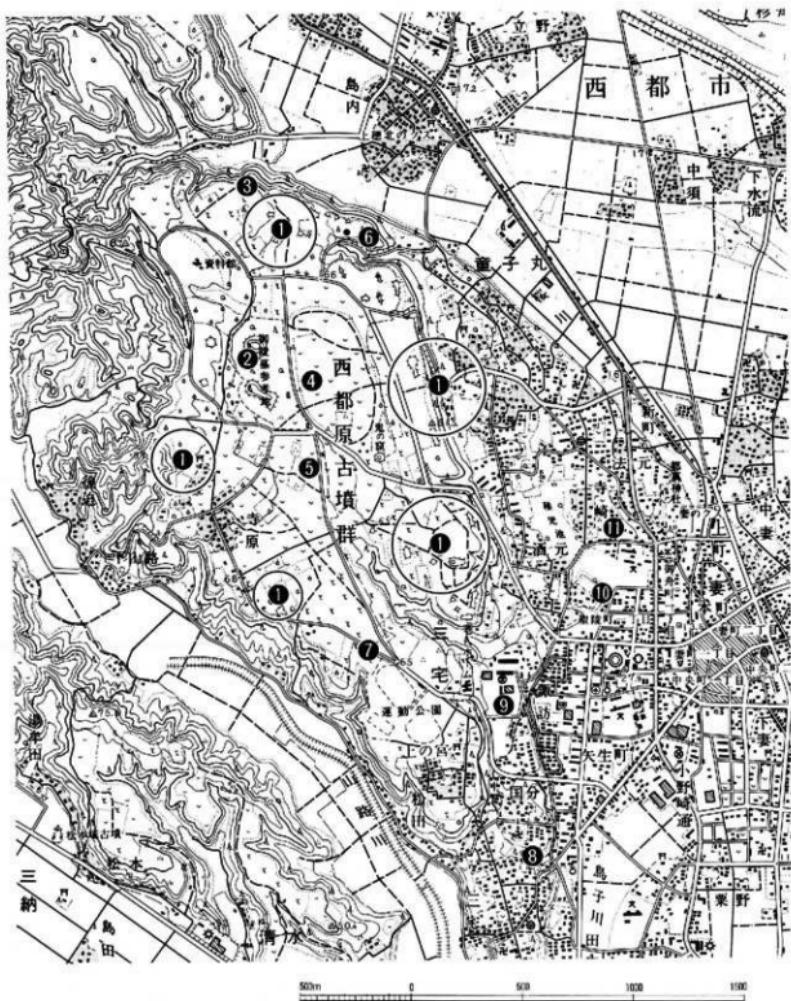
(4)
西都原地区遺跡は、寺原・丸山・原口・西都原遺跡の4遺跡を総称した呼び名で、いずれも西都原台地上に位置している。原口遺跡は台地南側周辺、寺原遺跡は原口遺跡の北側（寺原集落の東側周辺）に位置し、丸山遺跡は台地北側周辺、西都原遺跡は台地ほぼ中央部の東側周辺に位置している。これら遺跡内からは丸山遺跡（平成元年度）で縄文時代早期の焼燐群、原口第2遺跡（平成2年度）からは古墳時代後期の堅穴式住居跡2軒、寺原第1・第4遺跡（昭和58・59年度）からは弥生時代終末の堅穴式住居跡3軒などが確認されている。また、同台地北東端の新立遺跡からは、弥生時代終末から古墳時代初頭の堅穴式住居跡20軒が検出されている。

日向国分寺跡は、西都原台地と西都市街地の中間台地に位置している。台地の北方、北・東側は断崖、西側は西都原台地、南側は谷地形に挟まれている。また、北方600m程の妻高等学校敷地内には同尼寺跡も保存されており、本地域は歴史的にも価値のある重要な地域となっている。また、国分両寺は国府の近くに置かれるのが全国的な通例であるが、現在国府の推定地となっている地域を平成元年度に県及び市教育委員会で試掘調査を行ったが、わずかな布目瓦のみしか検出できなかった。結果的には、弥生時代を中心とした集落跡が確認されて、前方後円墳5基を含む古墳20基（特別史跡・西都原古墳群）も所在していることから、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡所在地域として位置づけられる。

このように、西都原台地上はもちろん、日向国分寺跡を含む中間台地は古代日向国の中心的な役割を果たしてきた、歴史的な環境をもつ地域であったと思われる。

(註)

- (1) 松本 昭「宮崎県日向国分寺」「日本考古学年報」I 日本考古学協会纂 1949
- (2) 宮崎県教育委員会「日向国分寺跡」「日向遺跡総合調査報告」第3号 1963
- (3) " 「国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査報告」III 1963
- (4) 宮崎県・西都市教育委員会「西都原地区遺跡」
『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996
- (5) 西都市教育委員会「遺跡所在確認調査に伴う市内遺跡発掘調査概要報告書I」
『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第23集 1996
- (6) " 「市内遺跡発掘調査概要報告書II」
『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第25集 1997
- (7) " 「市内遺跡発掘調査概要報告書III」
『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第27集 1998



- 1. 西都原古墳群
- 2. 御陵墓（男狹穗塚・女狹穗塚）
- 3. 丸山遺跡・4. 西都原遺跡・5. 寺原遺跡（西都原地区遺跡）
- 6. 新立遺跡
- 7. 原口第2遺跡
- 8. 日向国分寺跡
- 9. 日向国分尼寺跡
- 10. 酒元遺跡
- 11. 寺崎遺跡

Fig. 1 西都原古墳群周辺位置図

第III章. 西都原地区遺跡の調査

第1節. 調査区の設定と概要

西都原地区遺跡については、これまでに、圃場整備をはじめ道路拡幅等に伴う発掘調査が行われているが、なかでも、平成5年度から平成9年度まで実施された圃場整備に伴う発掘調査は、調査面積が90,000m²にも及ぶ大規模的なもので、道路及び削平によって地下遺構の保存が困難な部分について行われた。この調査では、縄文時代早期の集石遺構及び焼窯群をはじめ、弥生時代中期の竪穴式住居跡や古墳時代前期の竪穴式住居跡群、さらには、横穴墓と地下式横穴墓との折衷形として注目された古墳時代後期の横穴墓などが検出された。位置的には、そのほとんどが西都原台地縁辺部であり、台地中央部からは弥生時代の竪穴式住居跡などが検出されているものの、密度的にはかなり低いことが判明している。また、古墳の築造に関連した人々の遺構が確認されなかったことから、台地上は古墳を築造する特別な空間、いわゆる聖域として認識していたものと想定される。

このような中、本年度については、陵墓の西側及び南側の圃場整備された地域を中心に、台地北東部など天地返しがされる畠地の確認調査を行った。調査は、第1地点～第29地点の29ヵ所にも及び、対象区域の面積も約12,5000m²と広範囲で苦慮したが、幅2mのトレンチを8～10m間隔に設定し遺構・遺物の遺存状況等の確認を行った。また、遺構・遺物等が確認された場合には、トレンチを増設及び拡幅して、詳細な調査を行った。

検出は、アカホヤ火山灰層を中心に行ったが、アカホヤ火山灰層の遺存率は全体の5割程度であり、かなり削平されている地域が多かった。

また、アカホヤ火山灰下層の文化層については、トレンチ内に幅2m・長さ2m程の小トレンチを設定して遺構・遺物の遺存状況等の確認を行なった。

調査の結果、台地北部及び北西部の縁辺部（第10・11・14地点）から縄文時代早期の焼窯群をはじめ、据立柱建物跡（第26地点）のものと推定される柱穴群、そして、台地のはば中央部、陵墓の西側地域（第17・24地点）からは、弥生時代後期のものと推定される竪穴式住居跡2軒などが確認された。この竪穴式住居跡については、周辺を詳細に調査した結果、群在していないことが確認された。

これら遺構は、いずれも圃場整備時、同様なものが検出され、予測はされていたものの、プラン的に特徴的な竪穴式住居跡や、焼窯群が予測以上に広がりを見せたことなど、大きな成果を上げることができた。

なお、焼窯群が確認された部分については、地主の方のご協力を得て、米年度本調査を行うことになった。竪穴式住居跡については、一部を除き、記録後現状のまま保存措置を講じることとなつた。

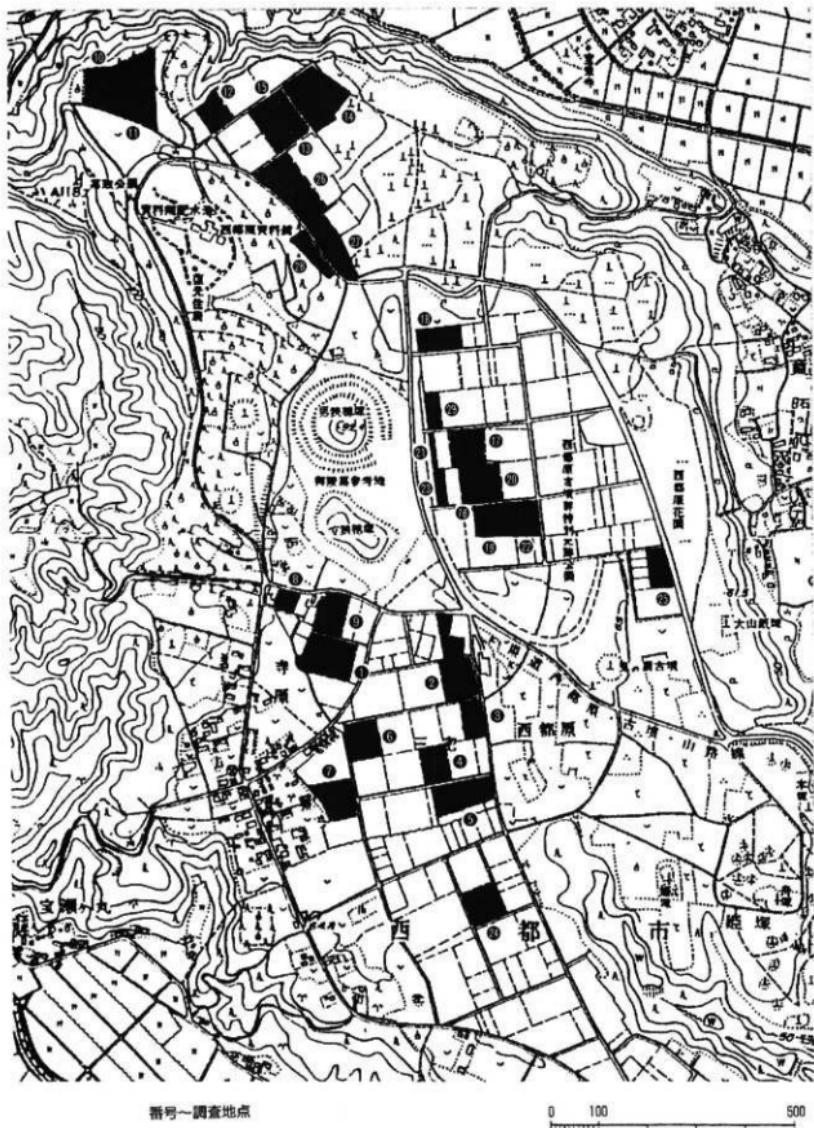


Fig. 2 西都原地区遺跡調査区域図 ($S=1/10,000$)

第2節. 造構と遺物

【焼礫群】

焼礫群は、西都原台地北部及び北西部の第10・11・14地点で確認された。これら周辺については、圃場整備に伴う調査の際にも、焼礫群及び集石造構が検出されており、広範囲に分布しているものと思われる。

【竪穴式住居跡】

竪穴式住居跡は、広範囲の調査にもかかわらず3軒しか検出されなかった。

第8地点の住居跡(Fig.3)は、一辺3.70mの規模を有する方形プランのものであるが、東側が耕作によりかなり削平されており、検出面と床面がほぼ同一レベルである。検出面からの深さ0~0.1mを計る。床面は平坦で、主柱は2本である。遺物は、床面に張り付いた形で、多量に出土している。器種もバリエーションに富んでおり、口縁部が「く」字状に外反し、突帯を有している大型の罐形土器(Fig.3~1)をはじめ、刻目突帯を有する下城系の罐形土器(Fig.3~2)、鋤先状口縁の壺形土器(Fig.3~3)などが出土している。時期は出土土器の特徴から弥生時代後期初頭頃と推定される。

第17地点の住居跡は、陵墓の西側150mから検出されたもので、長軸4.35m・短軸4.05mの規模を有する方形プランのもので、検出面からの深さ0.35mを計る。床面は平坦で、主柱は2本である。遺物は、量的には少なく、緑泥岩製の石鐵及び剝片が主で、その他弥生土器・磨製石斧が出土している。時期は共伴遺物から弥生時代後期と推定される。

第24地点の住居跡(Fig.4)は、第17地点の住居跡から南西130mに位置し、長軸4.70m・短軸3.00m、南辺と西辺の中央部に突出壁を有する長方形プランのものである。検出面からの深さ0.40mを計り、床面は平坦である。柱穴は3個検出されているが、主柱は2本と思われる。特徴的なのは、その主柱の位置と掘り方である。これまで西都市内において検出された住居跡は、いずれも主柱は中央部にあり、本住居跡のように両サイドの壁面に接して、しかも、外側に向かって掘られているものではなく、住居の構造を考えるうえでは貴重な資料である。遺物は、全く出土しておらず、時期的なことは不明である。

【ピット群】

第26地点からは、広範囲にピットが分布している。これらの中には、直線的なものもあり、掘立柱建物跡の存在が想定されるが、狭範囲の調査のため、詳細については不明である。

なお、この第1地点の南側、東西に延びている道路でも圃場整備に伴う調査の際、多くのピットが検出されている。

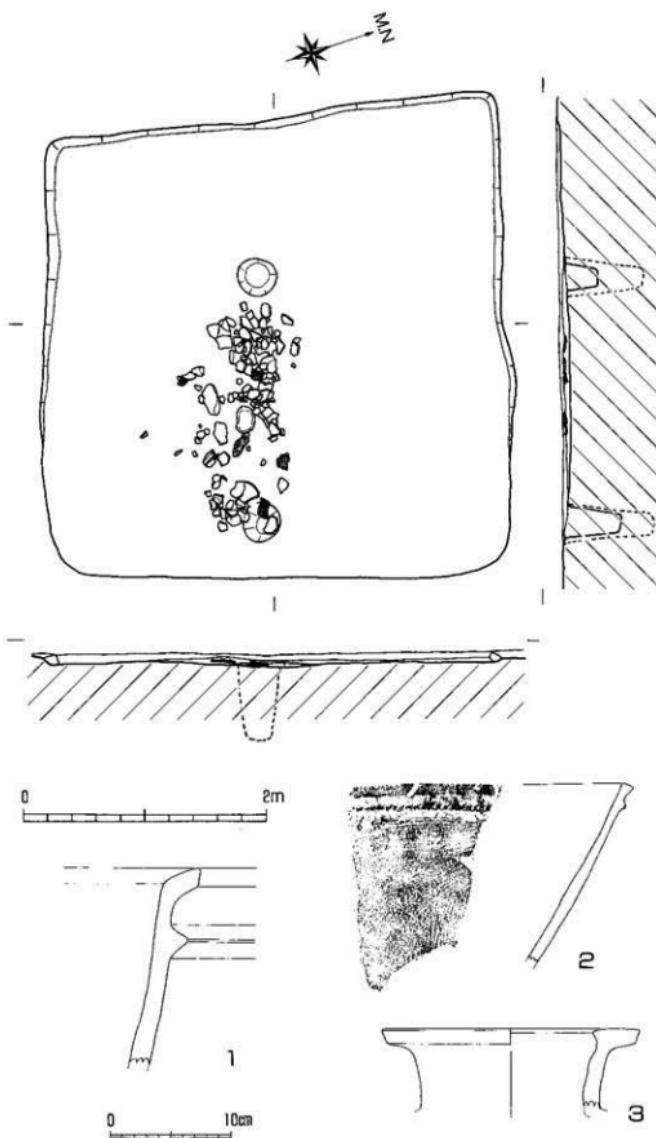
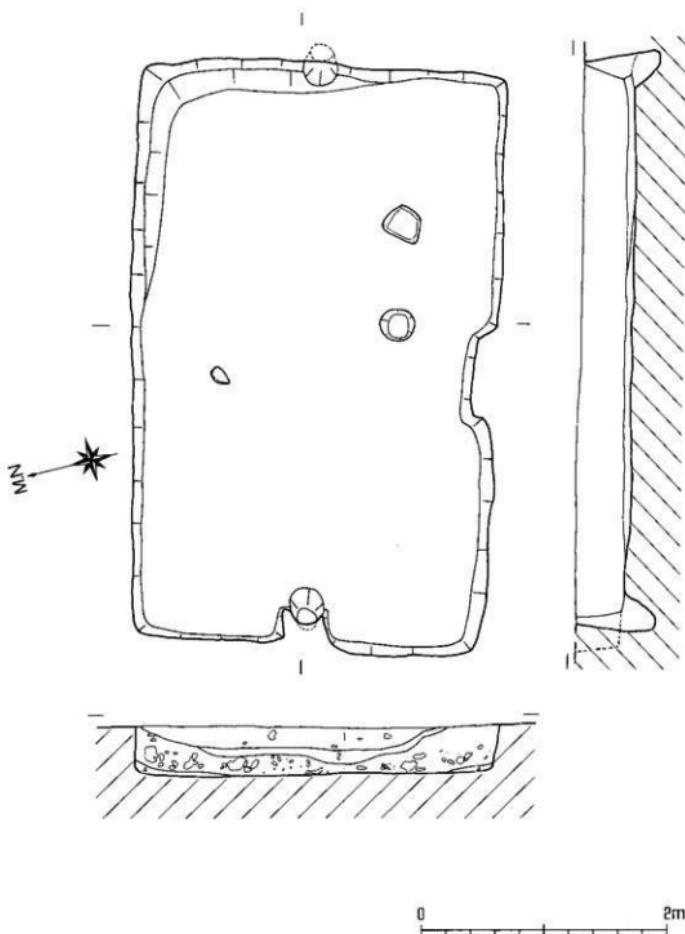


Fig. 3 第8地点住居跡($S=1/40$)・出土遺物実測図($S=1/4$)



1. 黒色土 アカホヤブロック混入(Hve7.5YR1.7/1)
2. 黒色土 きめ細かい、アカホヤブロック含まず(Hve10YR1.7/1)
3. 黒褐色土 アカホヤブロック多量混入(Hve10YR2/2)
4. 黒褐色土 アカホヤブロック含まず(Hve10YR2/2)

Fig. 4 第24地点 住居跡実測図(S=1/4)

第3節 小 結

西都原地区遺跡は、西都原古墳群に隣接した重要な地域であるが、これまでに、童子丸墓地造成に伴う発掘調査をはじめ、圃場整備等に伴い行われた大規模的な発掘調査によって、様々なことが判明してきた。

それは、西都原台地北西の縁辺部を中心とした地域からは縄文時代早期の遺構等が検出され、古い時代から生活が営まれていたこと、また、弥生時代及び古墳が築造される直前の住居跡は検出されるものの古墳を築造した人々の居住に関連した遺構が検出されてないこと、さらには、地下式横穴墓のほかに、地下式横穴墓と横穴墓の折衷形として注目されている横穴墓が検出されたことなどである。

なかでも、特筆されるのは、古墳を築造した人々の居住に関連した遺構が検出されなかったことで、今回の調査でも、前回同様に関連した遺構は検出されなかった。弥生時代の住居跡は検出されているのだから、古墳時代に至っても、そのまま居住空間として利用してもいいはずであり、それが自然の流れであると考える。ところが、継続して利用された形跡はなく、この時期の住居跡が、西都原台地東側眼下に広がる中間台地から検出されていることから、古墳の築造と居住空間の移動とが何らかの形で関わっているのではないかと、前回の西都原地区遺跡に関連した報告のなかで推測を行った。

今回の調査で、このことがさらに証明されたことになったが、謎の多い西都原古墳群の謎を解く重要な鍵であり、今後も慎重な検討が必要である。

また、来年度も天地返しに伴う試掘調査を行う予定であり、さらに、本年度試掘調査によって遺構が確認された地域については本調査を行うことから、この調査結果を基に、さらに検討を加え解明していくかなければならないと思われる。

第Ⅳ章. 日向国分寺跡の調査

第1節. 調査区の設定と概要

日向国分寺跡については、前記のとおり、昭和23年に駒井和愛を団長とする日向考古調査團⁽¹⁾が、また、昭和36年及び平成元年度には県教育委員会が確認調査を実施している。昭和23年の調査地点については、資料不足のために明示できないが、昭和36年分については、旧堂宇いわゆる五智堂及びその南側を中心に、平成元年度については寺域の北側にあたる部分（中央東西道路の北側）の確認調査が実施されている。

昭和23年及び昭和36年の調査では、伽藍配置などについては明確にされていないが、平成元年度の県教育委員会による調査では僧房跡と想定される掘立柱建物跡などが検出された。

西都市教委による日向国分寺跡の調査は、平成7年度から実施しているが、7年度の調査では金堂のものと推定される掘込地業跡や推定回廊跡（並行したピット列）、さらに、その回廊の外側に巡らされていたと推定される溝状造構（雨落ち溝）が検出されている。これらは、いずれも主要伽藍配置に関する造構で、今まで明確にできなかった主要伽藍配置の一部を特定することができた。⁽⁵⁾

平成8年度は、この調査を踏まえ、7年度検出した造構の確定及び溝状造構の範囲を確認するための調査を実施した。調査の結果、直行した溝状造構とそれに並行したピット列が検出された。ピットは溝に並行してほぼ等間隔に並んでおり回廊のものであること、また、II地点第1・3トレンチの溝状造構は、他トレンチ同様、回廊の外側に巡らされていたものと推定された。このことによって、溝状造構の東辺が確定されるなど大きな成果をあげている。

平成9年度は、これらの調査結果を踏まえて、主要伽藍西側と北側溝の確認、主要伽藍内及び周辺の造構等の有無確認についてという目的をもとに調査を行った。調査の結果、A区から片側3本ずつ計5本の柱穴が検出され、西向き6本柱の主要伽藍に取り付く西門の存在が確認できた。また、西門（推定）北側からは南北にのびる溝状造構（SE002）が検出され、主要伽藍を取りまくように溝状造構が巡っていることが確認できた。⁽⁷⁾

本年度の調査は、これらの調査結果を踏まえ昨年度検出した西門（主要伽藍に取り付く門）から南北に延びる溝状造構がどこまで延びるのか、また、主要伽藍南東側の平成7・8年度に調査を行った回廊跡（推定）を確定させるという目的のもとに行なった。

調査区の設定については、推定主要伽藍配置南東側をA区、南西側をB・C区、北西側をD・E区とし行った。（Fig5参照）

調査の結果、A区で以前確認されていた平行したピット列が回廊跡と確定され、最低でも3回の建て替えが行われていることが判明した。回廊の規模は梁行3.0m、桁行2.4~3.0mであり、雨落ち溝と思われる溝状造構が平行して巡っていることも確定した。また、B区とC区の第1~3トレンチから昨年検出された溝状造構が検出できたが、溝状造構南東の隅角は民家の下に位置しており確認できない。しかし、検出箇所から推定し主要伽藍南側の東西幅が84mと判明した。D・E区からは溝状造構が確認できず、主要伽藍を巡る溝状造構がこの箇所までは延びていないことが判明した。

※(註)は第II章参照

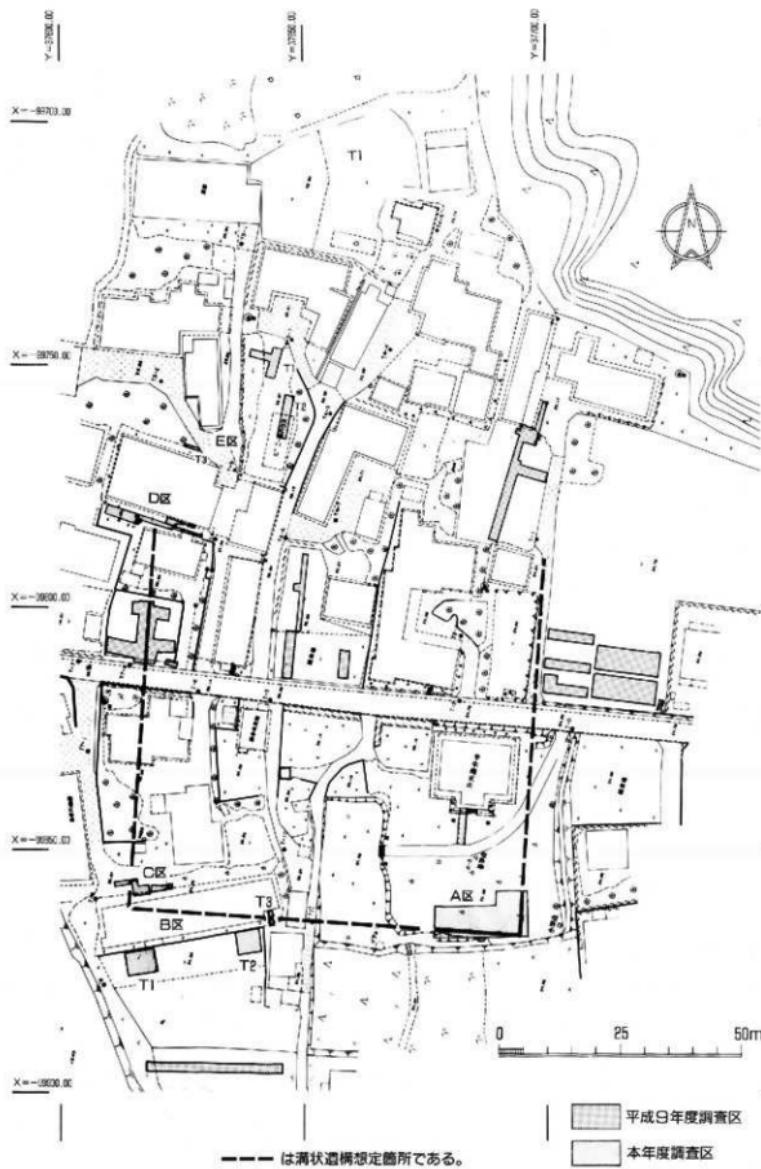


Fig. 5 日向国分寺現状平面及びトレンチ配置図($S=1/1,000$)

第2節. 造構

【A区の造構】

A区は平成7・8年度に確認されていた並行したビット列が回廊跡と思われ、これを確定するという目的で発掘調査を行った。調査区は当初東西15m、南北6mとしたが、最終的には東西約20m、南北6~9mの範囲に拡大した。(Fig.6参照)

調査の結果、約100個程の柱穴ないし柱掘形が検出された。確認されたこのビット群は、直徑30cm~1.3m程度で円形のものがほとんどである。中でも3回切り合っているものもあり、これらビットの埋土には瓦片が含まれているものもある。その結果、約30個のビットは一定間隔で縦横に連続しており回廊跡であると判明した。これは、柱の切り合い関係から導かれた所見であるが、回廊は最低3回にわたって建て替えが行われており、回廊の規模は梁行3.0m、桁行2.4~3.0mの一定間隔の柱間で、8尺ないし10尺の規格をもとに建立されている。

回廊は、第1回目に梁行3.0m、桁行2.4mの規格で建立されている。但し、回廊が北に折れる隅角の部分と一軒手前までは、梁桁ともに3.0m(10尺)で建立されている。どのような理由でこのような規格になったのかは不明である。図面上でスクリーントーンが第2回目の建て替えとして表示されているA区東側の箇所に関しては、第2回目の建て替えで再度その柱掘形を利用したと見られる。

第2回目は梁桁行とも3.0mになっている。第1回目に用いた柱掘形を避けるようにその中に新たに柱掘形を設けている。おそらく、この時点で何等かの規制が働き、一軒10尺の規格で回廊を建立しなければならなくなつたのであろう。

また、第3回目は第1・2回目よりも外側に梁桁行とも10尺で建立されている。この時点では、第1・2回目の回廊に付随していた雨落ち溝が埋没していたようであり、溝が完全に埋まってから第3回目の柱掘形が掘削されている。

また、回廊の1.5m程外側には以前の調査で主要伽藍を巡る溝状造構が検出され、この溝が回廊の雨落ち溝であることも確認できた。この溝は幅1.2m程度、深さは1~1.5m程度である。

第1・2回に建て替えられた回廊は、この雨落ち溝と平行しており、この溝が約100年程で埋没していることから、およそ10~50年の間隔で回廊が最低2回建て替えられたのであろうと思われる。

【B・C区の造構】

今回の調査は、もう一つ目的をもって行われた。それは昨年度の調査で検出された主要伽藍に取り付く西門北側の溝状造構が、南北にどこまで延びるのか、また、主要伽藍南西隅(想定)の箇所に主要伽藍を巡る溝状造構が検出できるかというものである。昨年度の調査では、主要伽藍に取り付く西門の北側にも溝状造構が延びていることが確認できていることから、B~E区に計8本のトレレンチを設定し調査を行った。(Fig.5参照)

調査の結果、B・C区では溝状造構は確認できたもののD・E区からは確認されなかった。したがって、主要伽藍の東西幅は84mと確定された。また、これらのトレレンチは当時の造構面もそのまま残存していることから、D区までは溝が延びておらず、途中でとぎれているのか、内側に曲がっているのかという疑問が新たに浮上した。

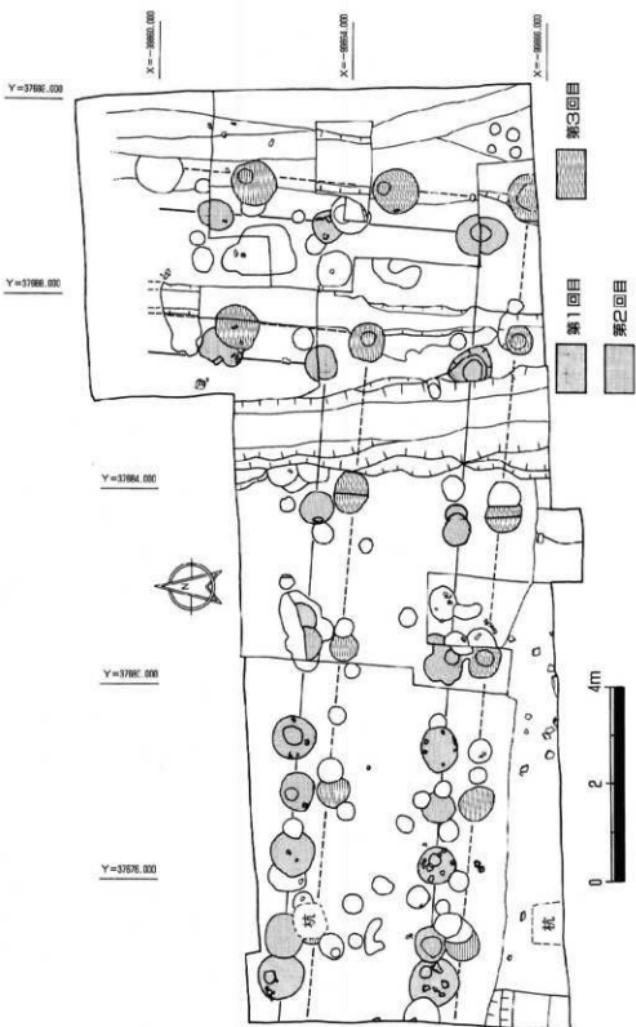


Fig. 6 日向国分寺跡 A区遺構実測図 ($S=1/100$)

第3節 小 結

本年度の日向国分寺の調査は、平成10年11月11日から平成11年3月5日までの39日間行った。

西都市教育委員会が、国庫補助を請けて行う日向国分寺跡の調査は、平成7年度から行われており本年度で第4次になる。昨年度までの調査で、平成7・8年度は主要伽藍を取り巻くと思われる溝状遺構や金堂の掘込地業跡（推定）、並行したピット列（回廊跡？）などが確認され、昨年度は主要伽藍西側に取り付く西門跡、そこから北に延びる溝状遺構が確認されている。

本年度の調査の結果、A区で平成7・8年度に確認されていた並行したピット列が回廊跡と確定できた。確認された柱掘形は、直径30cm～1.3m程度で大小様々である。回廊は梁行3.0mで、桁行2.4～3.0mの一定間隔の柱間であり、8尺ないし10尺（1尺30cm）という規格をもとに建てられている。また、回廊は3回の建て替えの中で最も古いと思われる柱掘形内にも、瓦片が裏込めとして混入されている。この柱掘形内に瓦片が混入されていることは、最初の回廊が建立される以前に何等かの瓦葺きの建物が建立していたのではないかと推定できる。当時、瓦は大変貴重なものとされ、一般的に官営の建造物（官衙・官寺など）に用いられているのみで一般の建物には用いられない。国分寺以前にそのような建物の存在は想定できず、回廊をもたない創建時の日向国分寺の姿が浮かび上がる。一方では、今回の調査区内で回廊のものと思われないピット（柱穴）が規則的に並んでいる可能性も考えられ、回廊の以前に築地塀が巡っていたのではないかとも予想できる。回廊は中門や金堂に取り付くと考えられることから、日向国分寺の主要伽藍部（中門・金堂など）に関しては、回廊以前の段階に築地塀の存在を考えなければ最低4回の建て替えが行われていることになる。回廊の3回の建て替えのうち、初めの2回は回廊に沿って巡る雨落ち溝内上層の埋土上に9世紀前半頃の土器が含まれていることから、約100年程度の間に行われていると思われる。従って、単純に考えると約40年～50年の間隔で建て替えが行われていたのであろう。当然、火災・地震・老朽化などの自然現象で国分寺が部分的に崩壊していくと考えられるため、一概に何十年に1回とはいえない。

また、B・C区からは平成7年度から検出されている溝状遺構（雨落ち溝）が確認され、以前からの推定どおり主要伽藍南西隅が確定された。但し、D区ではこの溝は確認されず、昨年度までに西門北側に溝が延びていることは昨年度の調査で分かっており、昨年度までに予想された主要伽藍を一周するような溝ではなく、途中でとぎれるのか、途中で曲がるのかということが今後の課題となつた。おそらく、この雨落ち溝は金堂に取り付くであろう回廊に添って巡り、金堂に取り付くか、裏側を回るのではなかろうか。

このようにみてくると、聖武天皇の『国分寺建立の詔』に始まった国分寺建立により、仏教信仰は中央集権国家としての政治体制により広範囲に拡大され、近畿から遠く離れた地域にも厳格な規制として長期間にわたり強くおよんでいたのであろうことが想像できる。また、地元の民にはその都度、再建協力が促され、仏教信仰を超えた多大な労力が課せられたであろうことも切実に伝わってくる。

今年度の調査でも、多くの成果が導き出され国分寺の壮大な姿にまた一步近づいた。来年度以降、より日向国分寺の実態が解明されていくことであろう。

図 版

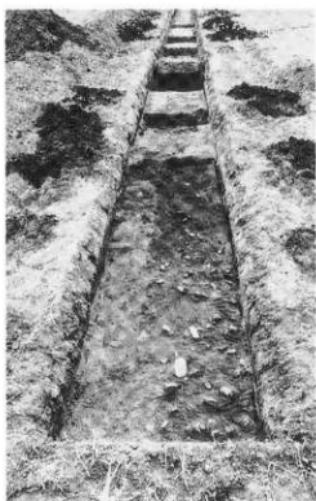
(PLATES)



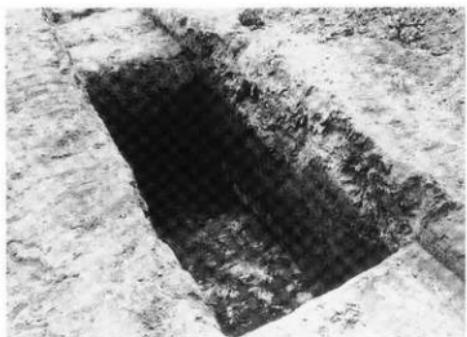
1. トレンチ調査状況(第1地点)



2. トレンチ調査状況(第10地点)



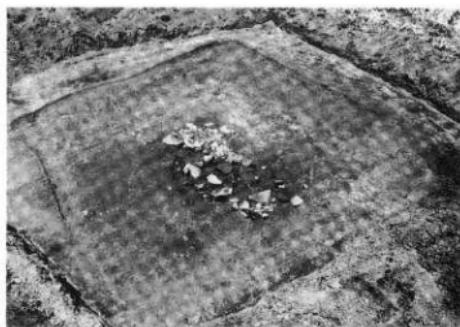
3. 第14地点 焼碟群検出状況



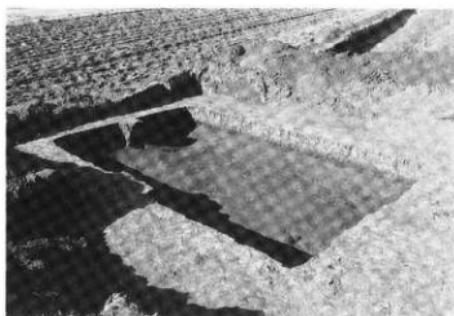
4. アカホヤ火山灰下層調査状況



5. 第26地点 ピット群(掘立柱建物跡)
検出状況

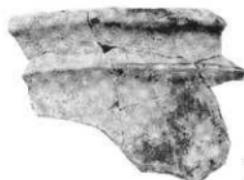


6. 第8地点 住居跡検出状況



7. 第24地点 住居跡検出状況

8. 第8地点 住居跡出土土器



1



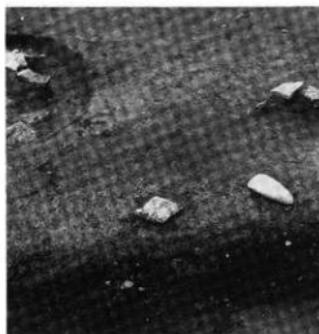
2



3



9. 日向国分寺跡 A 区全景(南西より)



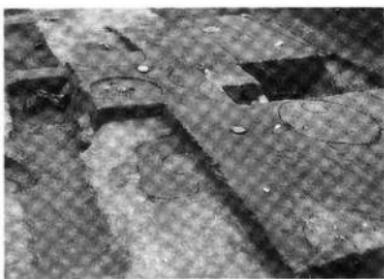
10. A 区軒平瓦出土状況(西より)



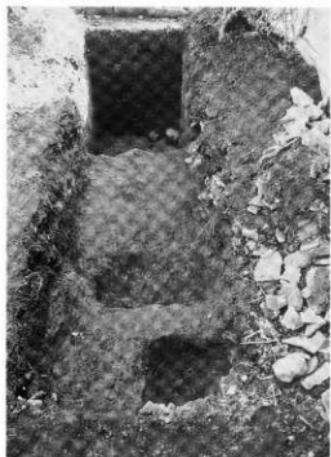
11. A 区東側造構検出状況(南より)



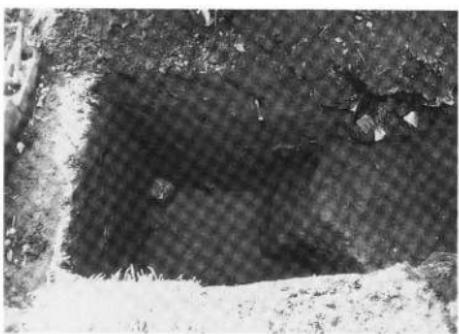
12. A 区南側造構検出状況(北西より)



13. A 区東側造構検出状況(南西より)



14. B区第3トレンチ造構検出状況(北より)



15. B区第3トレンチ溝状造構完堀状況(東より)



16. C区第1トレンチ溝状造構完堀状況(北より)



17. C区第1トレンチ造構検出状況(西より)

報告書抄録

ふりがな	さいとばるちくいせき ひめがくほんじあと					
書名	西都原地区遺跡・日向国分寺跡					
副書名	市内遺跡発掘調査概要報告書					
巻次	第4集					
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	第28集					
編著者名	糸方政幾・笠瀬明宏					
編集機関	西都市教育委員会					
所在地	〒881-8501 宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地 TEL 0983-43-1111					
発行年月日	西暦 1999年3月31日					
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号				
さいとばるちくいせき 西都原地区遺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおさみけいおひほんか 大字三宅寺原跡 他	1026 1029	X=-99000.00 X=-97000.00	Y=36000.00 Y=36800.00	19980804 19981104	125,000
ひめがくほんじあと 日向国分寺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおさみけいあごくぶ 大字三宅寺国分	1008	X=-99750.00 X=-99900.00	Y=37600.00 Y=37750.00	19981111 19990305	300
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
たばこ耕作 天地返しに伴う確認調査	生活遺構	縄文～平安	焼窯群 竪穴式住居跡3軒 掘立柱迹物跡	弥生土器 磨製石器		
遺跡所在確認 に伴う確認調査	国分寺	奈良～平安	主要伽藍東南隅回廊跡 溝状造構 5条	軒平瓦 丸・平瓦 土師器皿	回廊の最低3回の建 て替えが判明	

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第28集
西都原地区遺跡・日向国分寺跡
平成11年3月31日発行
編集発行 西都市教育委員会
印刷所 なかむら印刷所

